

一ノ関古墳(伊勢崎市)

前方が一ノ関古墳/6世紀後半築造の前方後円墳/北東側から見たところ



史跡公園として整備されている



伊勢崎市指定史跡

一ノ関古墳

平成10年12月28日指定

一ノ関古墳は前方後円墳で、粕川の侵食により前方部の大半を削り取られています。現存する墳丘は全長約28mですが、失われた前方部を合わせると、およそ50mの古墳に復元することができます。

墳丘は二段の葺石が築かれ、その間のテラスに円筒埴輪が立てられていました。また、下段の葺石から周堀までは約7mの基壇面が広がり、3段築成を意識して築造されており周堀は幅約5m、深さ約0.8mで墳丘をめぐっています。

後円部には横穴式石室が造られていて、入口を南に向けています。墳丘からは家形埴輪や円筒埴輪が出土しています。また、前庭付近からは須恵器の高坏なども出土しています。

築造年代は石室の構造や出土遺物から、6世紀後半と考えられます。周辺は本関町古墳群を形成していますが、そのほとんどが小規模な円墳であることから、この時期の地域の中心的な人物を埋葬した古墳と考えられます。

平成17年1月31日
伊勢崎市教育委員会

二段築成で下段には基壇面が広がり、三段築成のように見せているらしい/その外側は周堀が巡る



北側から南方向に見たところ



北西側から見たところ/右手(西側)は前方部で河岸段丘の縁の為、浸食を受け削られている



ここは後円部の墳頂/東方向を見たところ



右下の覆屋は石室開口部の入口



後円部から前方部方向(西方向)を見たところ/前方に粕川が流れる



右手を見たところ



更に右手(北方向)を見たところ



それでは後円部にある石室へと下りてみよう



南東側から見たところ/左手が石室開口部の覆屋



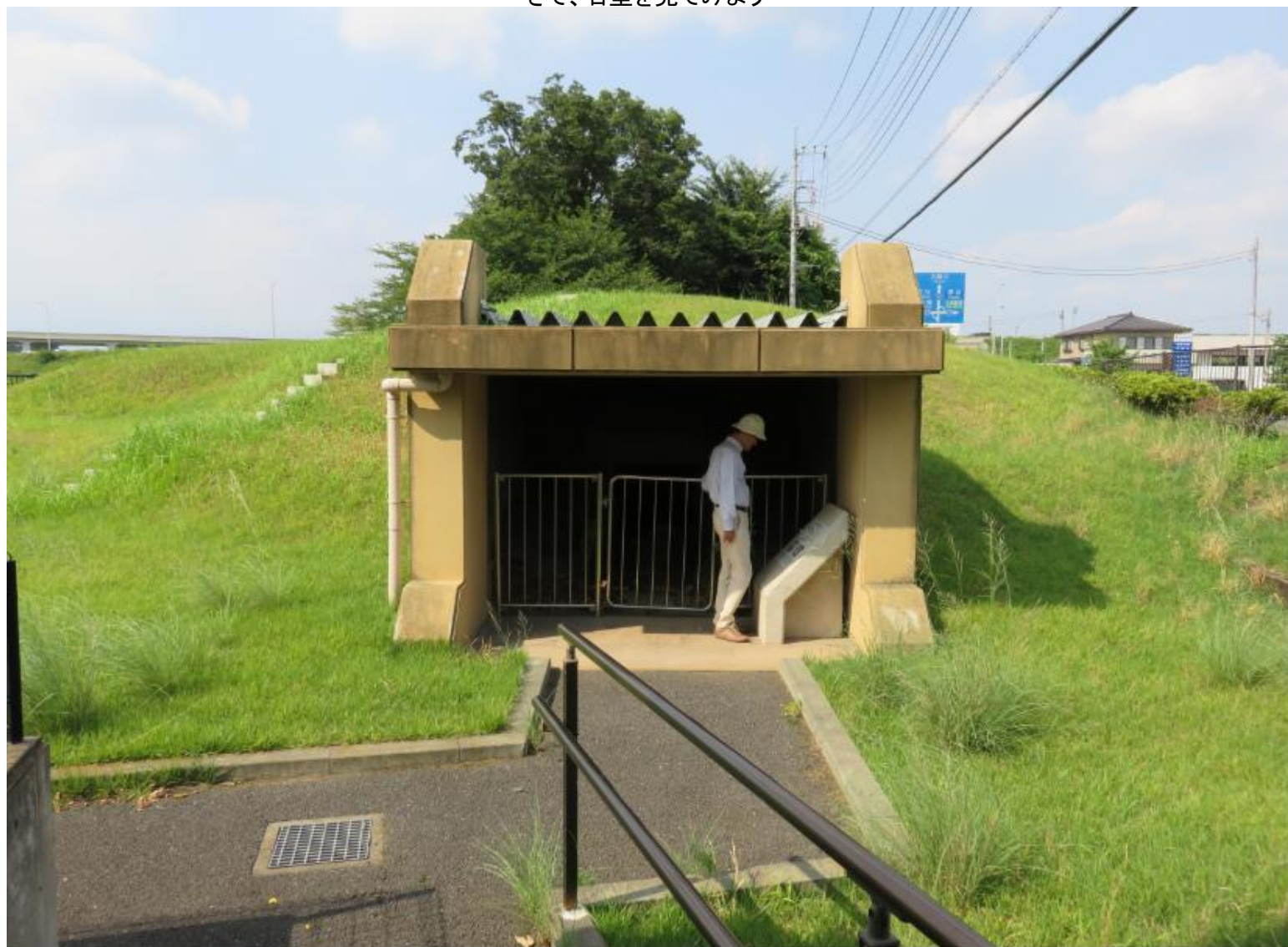
南西側から見たところ/左手が粕川



右手を見たところ



さて、石室を見てみよう



右手に説明坂がある



いちのせきこふんせきしつ 一ノ関古墳の石室

石室は両袖型の横穴式石室で、遺体を埋葬した玄室と通路の役割をもつ羨道からなっています。全長は約6m、奥壁部の幅は約1.5m、高さは約2mです。石材には輝石安山岩の割石を使い、奥壁には巨大な石を使用しています。石室は当時の地表面を掘り込んで造られており、外側には補強のための石組（控え積み）が行われ、天井石の周りは粘土で覆われていました。

羨道の入口は石でふさがれ、前面には墓道のような細長い前庭が設置されています。この前庭は幅が0.8mと狭く、羨道入口から下段臺石におけてスロープ状に造られたもので、たいへん珍しいものです。

遺物は石室内にはほとんどなく、前庭などから須恵器の高坏、提瓶が出土しています。



玄室の天井石

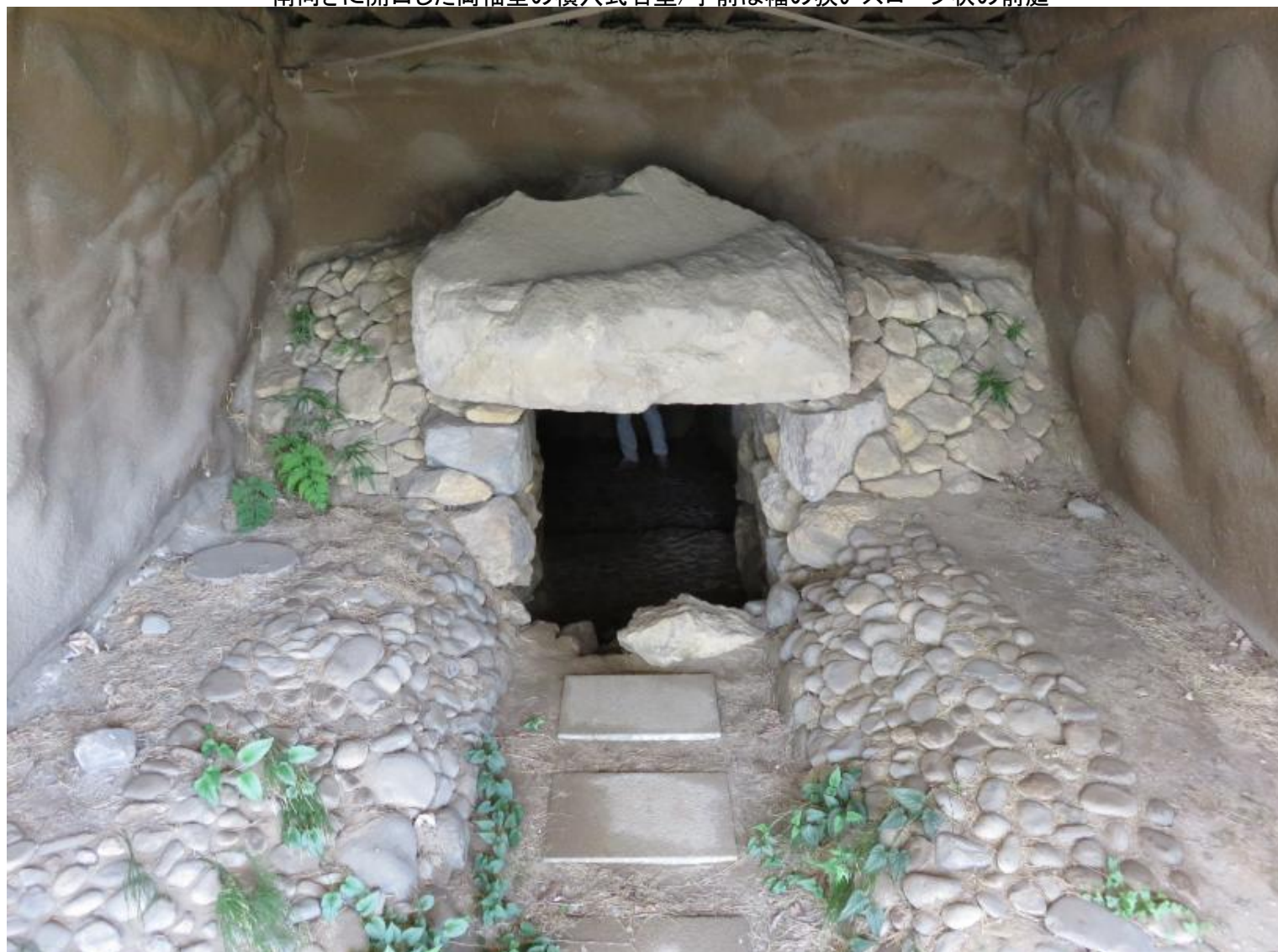
天井石は玄室と羨道を覆っていましたが、玄室部の三石だけが残され羨道部のものは失われていました。天井石は輝石安山岩の自然石を利用し、大きさ、形状にはばらつきがあり、一番奥の天井石は約4トンもの巨大な石材を使っています。



控え積みのようす

石室を造る際、まず壁となる側壁や奥壁を、一番下の根石から順に数石積み上げます。その外側約1mのところにも石を積み上げ、その間に石を詰め、隙間を砂で埋め、壁石の補強を行います。この補強方法を控え積みといいます。この工程を数回繰り返し、最後に天井石をのせ石室は完成します。

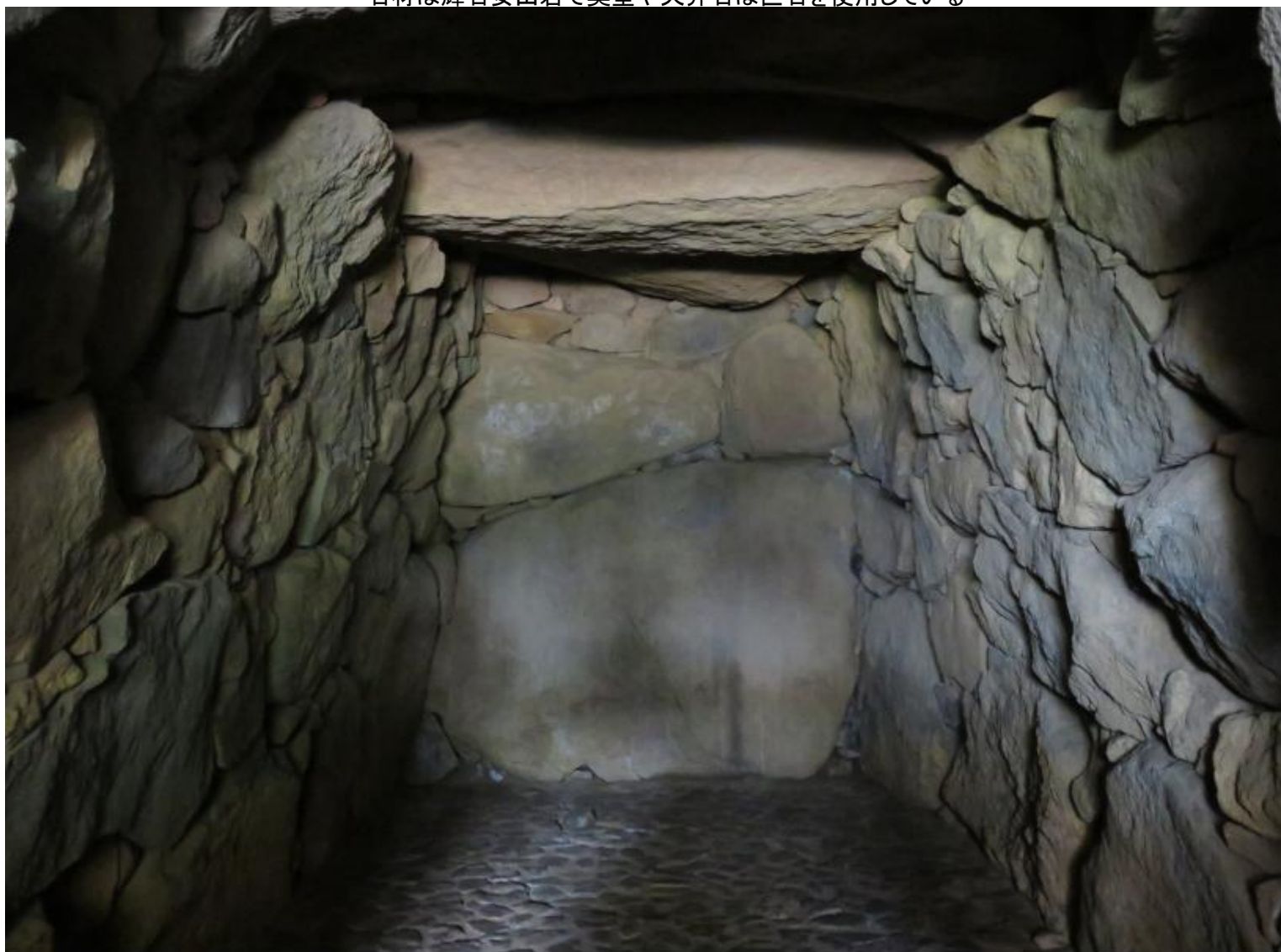
南向きに開口した両袖型の横穴式石室/手前は幅の狭いスロープ状の前庭



羨道から玄室を見る



石材は輝石安山岩で奥壁や天井石は巨石を使用している



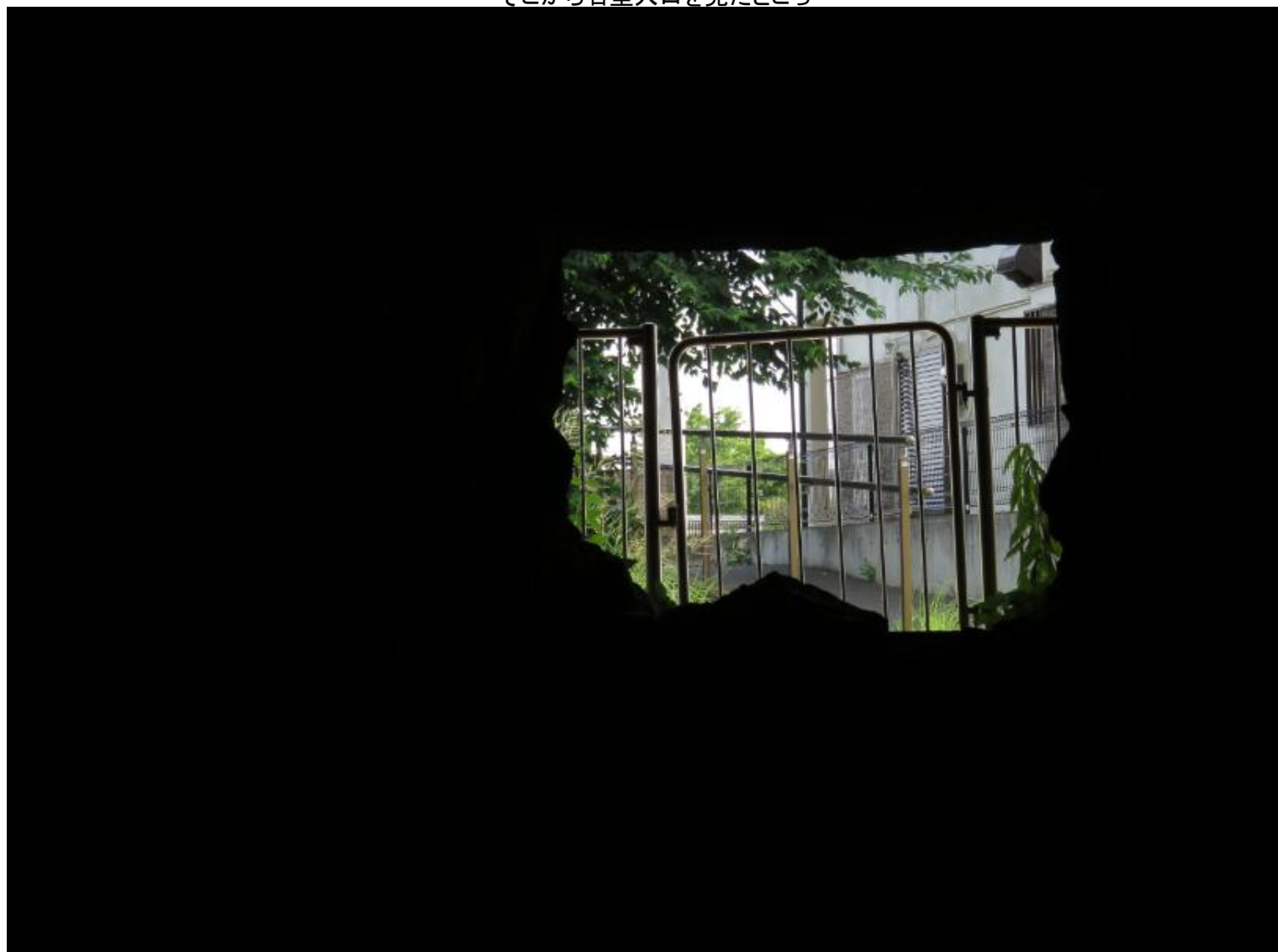
上部のアップ



下部のアップ



そこから石室入口を見たところ



参考ホームページ

http://sgkohun.world.coocan.jp/archive/index.php/isesaki_itiseki/

<http://www.city.isesaki.lg.jp/www/contents/1355279279161/index.html>

<http://www13.atpages.jp/ootama/page069.html>

<http://tigerdream-no.blog.jp/archives/26947087.html>

http://www.go-isesaki.com/kohun_ichinoseki.htm

